



山おろち

川崎ゆきお

「以前は出来て、今は出来ないことが多いですなあ」

「それはお年で体力的にですか」

「そうですなあ。気がつけば出来なくなっている。いや、無理にやろうと思えば出来るんだけど、昔のようにはいかない」

「はい」

「あの山」と、老人が指差す。かなり遠くに山が望める。

「山登りですか」

「昔はあの頂、一番高いところですがね、あそこまで登り、山の向こう側へ降りて戻ってきた。最後に登ったのはいつ頃だろうかねえ。まだ若い頃だったと思うねえ。山登りの趣味はないので、登ったのはその頃だけかな。何度か行ったよ」

「はい」

「友人の武田はねえ。よく登るらしいよ。朝からリュックを背負ってね。あいつは山歩きが趣味なんだろうが、若い頃はそれほど行っていたようには思えないから、老けてからだろうねえ。あいつは車が好きで、ドライブによく連れていってもらったよ。それがいつのまにか歩くようになった。きっと健康のためだろうねえ」

「そうなんですか」

「君は武田のことは知らないだろ」

「はい、存じておりません」

「武田が、どうして山歩きを始めたのかというとね」

「健康のためでしょ」

「山おろちを探すためだよ」

「はあ」

老人は微笑んだ。薄気味悪い微笑みだった。

「ヤマオロチ？」

「山蛇だよ」

「マムシとか」

「マムシなら珍しくはないよ。そこの河原にたまに出るだろ。雑草が多いんだ」

「見ました。マムシ注意って立て札」

「だから、わざわざマムシを探しにあの山へ入るんじゃないんだな。武田は」

「山おろちってなんですか。別の種類の蛇ですか」

「ツチノコのようなものさ」

「久しぶりに聞きます。ツチノコ。しかし、捕獲例は未だにないですよ」

「山おろちはヤマタノオロチの超マイクロ版だ。カマキリほどの大きさらしい」

「頭が八つほどあるあれですか」

「怪獣映画キングギドラのようなものさ」

「知りません。そんな映画」

「武田は山おろちがいるとあって、月に何度かあの山を歩いておる」

「あの山の山おろちは有名なのですか」

「いや、誰も知らん。言ってるのは武田だけだ」

「はあ」

「羨ましいよ」

「武田さんがですか」

「そうだ。理由はどうあれ、山歩きが出来る。私はそんな元気はない。歩くだけじゃつまらんしね。竹田には用事がある」

「山おろち捕獲ですね」

「おるわけがない」

「あ、はい」

了